

佳作

レッテル

埼玉県立伊奈学園中学校 3年

大熊 心結

私には、一生忘れられないある体験がある。その体験は、私の人生観を根本から変えてしまう、非常に大きな出来事であったのだ。

中学一年生の秋。私は総合の授業に臨んでいた。テーマは「福祉」。そう聞かされていたが、正直ピンときていなかった。なぜなら、周りに障がい者など一人もいなかったからだ。そんな少し困惑気味の私の前に、その人は現れた。今回は、Aさんと呼ぶことにする。Aさんは、人口肛門を取り付けていた。私は、障がい者は日々生きるのに精一杯で、家族の助けを借りて毎日在家中で過ごしているのだと思っていた。また、そのようなことを考えることもないくらい、障がい者という存在が周りにいなかった。しかし、Aさんの存在は、私のそんな障がい者のイメージを木っ端微塵にしまったのだ。Aさんは、「オシャレしたい気持ちに障害の有無は関係ない。」と言い、義足でも履けるオシャレ靴のブランドを立ち上げた方だ。障がい者って仕事はしているのかな、という疑問をもって私からすれば、本当に驚きだ。障がいをもっている方は、自分の障がいに真正面から向き合っているからこそ、本当に強い人達なんだな、と感じた。また、こんな方にも出会った。今度は、Bさんと呼ぶことにする。Bさんは、視覚障がいで目が見えない。それなのに、漫画家なのだと言う。これも目から鱗だ。様々な困難を乗り越えて、今のお仕事を頑張っていらっしゃるんだな、と感じた。

この経験を通して、私の障がいをもつ方のイメージは大きく変化した。今までは、障がいをもつたらずっと絶望感に苛まれるだろうな、と思っていた。しかし、実際は、障がいをもつ方は絶望を乗り越え、今を懸命に生きていた。障がいの有無関係なく、みんなが仕事や趣味に没頭していたのだ。

私が今思っていることは、健常者と障がい者という言葉をなくしたい、ということだ。この言葉があるから、両者の間に壁が生まれてしまうのだと思う。障がいをもっている人というレッテルを貼るのはやめ、ある意味普通に接する。しかし、もしできないことがあれば助け合う。これが私達が生きるうえで大切なことではないだろうか。